

秘密の司書くん♡ ～瀬川くん観察日記～

「いや、今日も湊様素敵すぎだろ……！」

勤務終わりの更衣室で、真緒は盛大に一人ツッコんだ。誰もいないのを確認してから、ロッカーに額をごつんとぶつける。三十一歳、独身、彼氏なし歴ほぼ年齢イコール。そんな自分が「様」付けで男の名前を呼んでいるという現実が、じわじわ恥ずかしかった。

でも仕方ない。今日の瀬川湊は、ずるすぎた。

閉館間際、返却ボックスが溢れかけているのに真緒が気づかずにいたとき、彼はすでに横に立っていた。「手伝います」の一言もなく、ただ黙って隣で本を仕分けはじめて。真緒が「あ、すみません」と言うと、「いいえ」とだけ返した。その「いいえ」の声が、また低くて。

……反則だろ、あの声。

真緒は鞆を抱えて更衣室を出ると、スマホを取り出した。LINEを開いて、「瀬川観察日記」のグループをタップする。

今日の報告です。18:47、返却ボックス事件。無言で助けてくれました。「いいえ」の
声が良すぎた。以上。

送信して三秒で既読がついた。

なぎさ：やば、待ってた。やば さくら：「いいえ」って何！？ニュアンス教えて！！
もえ：声どんな感じだったの低さ10段階で

真緒は「8.5」と送って、スマホをポケットに突っ込んだ。

このグループができたのは、真緒がここで働き始めて三ヶ月が経った頃だ。発起人は同僚のなぎさで、「瀬川さんのことが気になりすぎるので記録する場所が必要」という理由

だった。今では四人が日々エピソードを持ち寄り、解釈し、時に熱く議論する。立派なファンクラブである。

ただし、対象本人は一切知らない。

図書館の自動ドアをくぐると、夜の空気が頬に当たった。秋の終わりの、少し冷たい風。真緒はマフラーを巻きながら、今日の「いいえ」をもう一度頭の中で再生した。

駄目だ。何度聞いても良い。

——でも、と真緒は自分に言い聞かせる。

こういうのは「好き」じゃない。ただの、職場の潤いだ。三十一歳が職場男子にきゃあきゃあするのは観察日記の中だけで完結させるべき話で。だいたい自分には、そういう話が似合わない。学生の頃からずっとそうだった。告白された記憶も、される気配も、ほとんどなくて。気づいたらこの年齢で、恋愛の仕方を忘れていた。

まあ、いい。湊様は観察日記の推しであって、現実の話ではない。

マフラーを少し深く巻いて、真緒は駅へ向かって歩き出した。

翌日も、その翌日も、瀬川湊は静かだった。

おはようございますと言えばおはようございますと返ってくる。お疲れ様ですと言えばお疲れ様ですと返ってくる。それだけだ。過不足ない。過不足なさすぎて、かえって観察のしがいがある、と観察日記メンバーは言う。

真緒がパートとしてつばき野図書館に勤め始めて、一年と少しが経っていた。

仕事内容は単純だ。返却された本を棚に戻す。貸し出しカウンターに入る。閉館前の整理をする。司書資格は持っていないので、選書や発注は正規職員の仕事だ。つまり、瀬川湊の仕事だ。彼は毎週末、新着棚の本を静かに並べ替えていた。何かの基準があるのだろうけど、真緒には分からない。

ただ、一つだけ気になっていることがあった。

最近、真緒が「読もうかな」と思っていた本が、リクエストも何もしていないのに棚に並んでいることが多い。先月は好きな作家の新刊。先々月は気になっていたエッセイ集。偶然だと思っていたが、三回続くと少し不思議になってくる。

でも聞けるわけがない。「私が読みそうな本、分かるんですか」なんて、どんな顔で言えばいいのか。

真緒は棚の整理をしながら、横目で湊の後ろ姿を確認した。今日もシャツの裾が少し長い。背が高いから、棚の上段に手を伸ばすとき背中中のラインがきれいに見える。

……観察日記に報告しなくちゃ。

事件が起きたのは、十一月の最終金曜日だった。

閉館三十分前、利用者がほぼいなくなったカウンターで、真緒が返却処理をしていると、隣に人の気配がした。

「佐野さん」

振り返ると、湊が立っていた。いつも通りの無表情で、いつも通りの低い声で。

「今日、時間ありますか」

真緒の手が止まった。

……今、なんて言った？

「え」と言ったきり、次の言葉が出てこない。湊は特に表情を変えず、続けた。

「飲みに行こうかと思って」

飲み。に行こうかと思って。

主語がない。「一緒に」という言葉もない。でも明らかに真緒に言っている。他に誰もいないから。

「……今日、ですか」

「はい」

「急ですね」

「ええ」

全然悪びれていない。真緒は内心の動揺を全力で押さえながら、「分かりました」と言っていた。

なんで即答したんだろう、と思ったのは一秒後だった。

閉館作業を終えて更衣室に駆け込んだ真緒は、震える手でスマホを取り出した。

緊急速報。 湊様に飲みに誘われました。

三秒で既読。

なぎさ：は？ さくら：は？？？ もえ：は????? なぎさ：ちょっと待って何が起きてるの さくら：「飲みに行こう」って言ったの？直接？

言いました。「今日、時間ありますか」から始まりました。

もえ：死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ なぎさ：実況してください絶対に さくら：逐一報告義務あり

真緒は口紅だけ塗り直して、更衣室を出た。

湊は入口の脇で、スマホも見ずに立っていた。ただ立っているだけなのに、様になる。本当にずるい。

「お待たせしました」

「いいえ」

また「いいえ」だ。8.5点の「いいえ」。真緒は平静を装いながら隣に並んだ。

「どこ行くんですか」

「駅前に一軒、良いところがあって」

良いところ。この人が「良いところ」と言う店がどういう店なのか、真緒には全く想像がつかなかった。

連れて行かれたのは、駅から二分ほどの小さなバーだった。

カウンター席が六つと、テーブルが二つ。照明が暗くて、静かで、本棚があった。バーに本棚。なんとなく納得した。

速報②。バーに来ました。カウンターに並んで座っています。膝が当たりそうな距離です。

なぎさ：膝が当たりそうってどういう状況　さくら：近い近い近い　もえ：正気を保って

正気を保て、自分。

湊はメニューも見ずにウイスキーを頼んだ。真緒はとりあえずジントニックにした。考える余裕がなかった。

グラスが来るまでの沈黙が、妙に苦じゃなかった。湊が静かなのはいつものことだし、このバー自体が沈黙を許してくれる雰囲気だった。小さなスピーカーからジャズが流れていて、マスターが無言でグラスを磨いている。

「よく来るんですか、ここ」

「月に一度くらい」

「一人で？」

少し間があった。

「今日みたいに、誰かと来ることもあります」

今日みたいに。今日みたいに、誰かと。

真緒は自分がその「誰か」に選ばれた理由を聞こうとして、やめた。聞いて、「たまたまです」と返ってきたら立ち直れない気がした。

二杯目が半分になった頃、湊が口を開いた。

「佐野さんって、本を読むとき、どこで読むんですか」

「え、家ですけど。ソファで」

「寝転んで？」

「……なんで分かるんですか」

「本の傷み方で大体分かります」

真緒は思わずグラスを置いた。本の傷み方。返却された本を見ただけで、どんな体勢で読んだかが分かる。それを一年間、真緒の借りた本で確認していた、ということ？

「……変なこと言いましたか」

湊が少し眉を寄せた。初めて見る表情だった。

「いえ、変じゃないです」と真緒は慌てて言った。「ちょっとびっくりしただけで」

「そうですか」

湊はグラスに視線を戻した。横顔がカウンターの照明に照らされていて、真緒はまたそれを見てしまった。

速報③。本の傷み方で読む姿勢が分かるらしいです。見られてました。

なぎさ：見られてたって何 さくら：それ好意じゃないの もえ：いや絶対好意だよ
真緒さん気づいて

好意。そんなわけない。これはただの観察眼が鋭い司書さんの話であって。

「もう一杯、どうですか」

湊の声が聞こえて、真緒はスマホをポケットに押し込んだ。

「いただきます」

三杯目が終わった頃、外はすっかり冷えていた。

店を出て、駅方面に歩き始めると、湊が「カラオケ、行きますか」と言った。

また主語がない。また「一緒に」がない。でも明らかに誘っている。

「カラオケ、好きなんですか」と真緒は聞いた。

「歌うのは得意じゃないです」

「じゃあなんで」

「続きが話せるから」

続きが話せるから。続きって何の続き。でも真緒の足は止まらなかった。

速報④。カラオケに行きます。どうなってるんでしょう。

なぎさ：え流れ速すぎない さくら：カラオケって密室じゃん もえ：真緒さん帰る
なよ絶対帰るなよ

帰らない。帰る気が全然しなかった。

カラオケボックスの小さな部屋に二人で入ると、湊はリモコンを手には取らなかった。

ソファに座って、ドリンクを頼んで、それだけ。BGMとして何かが小さく流れているけど、誰も歌わない。

「続き、って何の続きですか」と真緒は聞いた。

「本の話」

「本の話って、さっきしましたっけ」

「少し。もっと聞きたかった」

もっと聞きたかった。この人が「聞きたかった」という言葉を使うことに、真緒は少し驚いた。

それから二人は、本の話をした。真緒が最近読んだ小説のこと。湊が面白いと思っている作家のこと。好きなジャンルが微妙にずれていて、でもどこかで重なっている、そういう話。湊が喋るとき、いつもの職場より少しだけ声が柔らかくなる気がして、真緒はそれを聞きたくてつい質問を重ねた。

気づいたら一時間が経っていた。

「楽しかったです」と真緒が言うと、湊が「ええ」と返した。

その「ええ」が、なんか、良かった。

ドリンクのグラスを置いて、真緒が鞆に手を伸ばしたとき、湊が「もう少しいていいですか」と言った。

「……どのくらい」

「もう少し」

具体的な時間を言わない。真緒は鞆から手を離した。

それが合図になったのか、湊が少し体を真緒の方に向けた。距離が縮まった。ソファの上で、肩が触れそうなくらいの距離。

「佐野さんって、俺のことどう思ってますか」

真緒の心臓が跳ねた。

「……どう、とは」

「嫌いじゃないですよね」

「嫌いじゃないですけど」

「それ以上は」

そっと、でも間を取らずに聞いてくる。逃げ場がない。真緒は正直に言うべきか一秒だけ考えて、やめた。正直に言ったらどうなるか、少し怖かった。

「……推してます」

口から出てから、しまったと思った。

「推す」

湊が繰り返した。意味を確認するみたいに。

「職場の、その、応援してるというか、存在が好きというか」

「応援」